大賞

「ぼくのあしあと　総集編」

思永中学校　三年
梅田　明日佳

7月20日(木)　一学期終業式

プラモの箱だらけの本棚の一角に、貼り付けたもので大きくふくらんだ「自学ノート」のコーナーがある。「自学」とは、自分でテーマを見つけ学ぶこと、と言うとエラそうだが、単に「好きなことをして『学んだ』と言っていい」ということだ。小学生時代に宿題として始まったこの取り組みは、おそらくほとんどの人が卒業と共にやめてしまったが、その頃にはこれが遊びの中心となっていた僕は、中学生になってからも部活代わりのように続けてきた。

放課後、学校中の生徒がワイワイガヤガヤ大移動を始め、校舎全体がこれまでとは違う空気に包まれる中、僕はダッシュで学校をとび出す。僕が家で新聞を切り抜いたり、何か調べたり書いたりしている間に、学校ではチームワークや友情が深まったり、カップルが誕生したり消滅したりしていることに気付いたのは、つい最近のことだ。小説の中だけの話だと思っていた「かっこいい〇〇君のファンクラブ」なんていうものが自分の中学にも存在すると、どこからか母が仕入れてきて、僕はとても驚いた。放課後の学校にいない、ということは、中学生でありながら中学生の実態を知らない、ということになるのかもしれない。だが、この二年半、放課後の時間を自分の好きなように使えたことで、僕はやりたいことの多くを諦めずに済んだし、このノートを切符に、思ってもみなかった場所に行け、普通なら会えないような人と話せた。

終業式の後、担任の藤江先生に言われた。

「自学ノートはやってもいいけど、勉強に支障がないよう、ほどほどにね。」
美術の平戸先生からは、
「今年はポスター描く？」
「……すいません。」
「そうよね…今年は勉強したいよね…」
いよいよ僕も受験生だ。小学校受験のためクラスの半分が休みだった日、さびしくて、「じゅけんが、したい・かった。」
と泣いた日から、あっという間に九年経った。
今ほど小中高一貫に進んだ友達をうらやましく思ったことはない。が、昔を懐かしんで泣いている時間は既にない。
義務教育が終わって、続けて何か勉強したければ逃げられない受験勉強と、今しかできないこととのバランスをどうとればいいのか分からないまま、僕の「受験生の夏」は始まった。新しいことを始めない代わりに、これまで僕がどんなことをしてきたかを振り返ってみようと思う。
「自学」は広い範囲での取り組みだったのか、僕の小学校だけで静かなブームだったのかは分からないが、小一の頃からあり、不定期でやってくるその宿題を僕は楽しみにしていた。
小三の五月、自学が5ミリ方眼ノートにどんどんやっていい宿題として始まった。
一冊目の最初のページは、読売新聞平成23年6月1日朝刊「祇園太鼓像のバチ消えた」という記事の感想だ。何をしようかなあと考えていたら、母が新聞を持って来て、
「バチをとった人はバチが当たるぞ、とか書いたら面白いんやないん？」
と言った。一九五九年に制作された、小倉駅前にある祇園太鼓をたたく少年の像のバチがなくなっていて、福岡県警小倉北署は器物損壊容疑で調べている、と書いてある小さな記事をノートに貼り、僕は考えに考えた。
「あのバチ、外れるん？どんな人がこんなしょうもない

ことしたん？」

ところが書けたのはオリジナリティゼロの、

「こくらえきの、ぎおんだいこのどうぞうの、右手のばちがなくなっていました。とった人は、ばちがあたるぞー‼6月1日朝かん」

先生はやさしく、

「ほんとうにバチがあたるよね‼」

とコメントをくださっている。

二日後の6月3日に僕は像を見に行っている。自分で撮った写真を貼り、

「きのう、ぼくは、小くらえきまえの、ばちがなくなった、ぎおんだいこぞうを見にいきました。ばちがなくなった、ぞうには、かわりに木のばちをもたせてありました。ぼくは、ぎおんだいこぞうのしゃしんをとりました。ほかにも『テレビで見たね』という人もいました。」

区切り方が変である。小学校の先生は、こんな平仮名ばかりのなぞなぞみたいな文章を日々解読しなければいけないのだから大変だ。先生は、「かわりに木のばちを」のところに赤ペンをひいて、「先生も見ました。」とコメント。

「祇園太鼓バチ事件」の追跡は続いた。

6月12日、「市民約30人が像を復活させようと募金活動をし、6万円を集めた。7月上旬に溶接して修復する予定」

7月10日、「祇園太鼓像のばち修復」を見て僕はその日のうちに確認に行っている。

「バチがもどってほんとうによかったと思います。きねんしゃしんをぼくもとりました。7月10日朝かん」

僕は新聞に、自分にも分かることが載っていることを知った。僕は新聞が好きになった。

7月21日(金)　夏休み終了まであと42日

今年の夏は格別に暑い。僕は家の中でする趣味が多いので、部屋が快適なら平気で何日も家にいられる。これから四十二日も休みなんて最高だ。そういえば僕は、イ

ンフルエンザによる学級閉鎖を経験していない。自分は元気いっぱいだけど学校に行ってはいけない、という状況に憧れていたが、結局小二と小六で自分がインフルエンザになって休んだ。人生は思うようにいかないことばかりだ。

受験生の夏が酷暑だったのは記憶に残りやすいが、では小学〇年生の夏がどうだったかというと覚えている人は少ないだろう。僕は新聞記事や記録のおかげで、その頃のことを簡単に思い出せる。

小四の夏休み、市の「省エネ王コンテスト」にチャレンジした。することは、毎日同じ時刻に電気メーターを見て、使用量を省エネチェックシートに書き込むだけなのだが、問題はどれだけ暑さを我慢できるかだ。ベランダのツタンカーメンの豆が枯れるほど暑い中、汗だくで節電したのに参加賞だった。その時に提出した感想文の一部を紹介しよう。

「ぼくは節電をがんばりました。風が強くてまどが開けられない時以外、エアコンをつけませんでした。電気をたくさん使うタコ焼きやホットサンドもがまんしました。冷ぞう庫と電話以外のコンセントもぬきました。12回も（平日）図書館ですごし、家ではかき氷を食べました。そして去年の８月より165キロワット節電しました。」

この月の電気使用量は202キロワット、こんなに頑張って一体何が足らなかったんだろう？参加賞のバッジを渡してくれた人に質問したら、

「消費電力以外に、家族で取り組んだ内容とか、そういうのもあるみたいです。」

と言われた。帰りながら僕と母は来年度に向け対策を練り、決意を新たにした。

「省エネ王になるには、面白い取り組み、そして作文だ！」

小五の夏は今年と同じような、連日35度超えの暑さだった。が僕達は頑張った。母は土鍋でご飯を炊き、毎日の消費電力は5キロワットを下回るようになった。新聞の集金の人がメーターの動きで「留守だと思った」と驚いたという面白エピソードもできた。

それでも省エネ王になれなかった。もしかしたら頑張りのベクトルを間違えたかもしれない。勝山公園の芝生広場のテントの前で、感想文が面白かったですなんて言われて、特別賞の賞状を読んでもらいながら僕は、戦地で芥川賞をもらった火野葦平みたいだな、と思った。この夏僕は、この先家の中でこんなに汗をかくことはないだろうという程の大汗をかき、精一杯やっても自分よりスゴイ奴がいれば勝てない、という当たり前のことを知った。

小六の夏休みは雨ばかりだった。プールはどこもガラガラ、野菜の価格は高騰した。僕は快適に除湿した部屋で、本をひたすら読んだ。この読書は、僕のプライドをかけた大一番でもあった。

北九州市には夏休みに「早寝早起き朝ごはん読書活動」という取り組みがある。小一の時、配られたパンフレットに読書記録をとって提出したら、表彰式に出ることになってびっくりした。翌年以降も表彰式には出られたのだが、一度も市内一位になれなかった。名前しか知らない強力なライバルに勝ちたくて頑張ったのに、審査方法が変わり、クラスでいちばん頑張った、みたいな賞状を教室でもらった。担任の先生も驚いて、何度も問い合わせしてくださったと聞いた。そして省エネ習慣がついたためか、普通に暮らしただけなのに「省エネ王」では特別賞をもらえた。

やっぱり人生って、思うようにいかないことばかりなのである。

7月24日(月)　夏休み終了まであと39日

新聞を読み、自学ノートを書くことで生まれた出会いがある。門司区の「めがねのヨシダ」の社長、吉田清春さんだ。

きっかけは、小三の6月9日朝刊「珍しい時計126点展示・門司。」六月十日の時の記念日に合わせて、吉田社長のコレクションを無料で展示しているという記事だった。

僕は大の時計好きだ。どれ位好きかというと、四歳の頃は一日一冊お絵かき帳をカラクリ時計だらけにし、図書館では約一年、時計と機械の図鑑だけを交代で借り続けていたというレベルだ。さらには、毎正時に動き出すカラクリ待ちで、僕はあちこちの時計屋で覚えられ、大きなボンボン時計が欲しくて開業医になりたいと思っていた時期もあった。

「カナダの工学博士が硬い紙だけで作製した掛け時計や、江戸時代に大名が目覚まし時計として使ったとされる和時計」なんて書いてある記事をワクワクしながら貼り、

「ぜひ、いってみたいとおもいます。」

と書いた一週間後に家族で出かけた。

「めがねのヨシダ」は、一階がめがね、二階が時計と宝石コーナーで、店内のあちこちに売り物にまざって珍しい時計が展示されていた。ブランコに乗った人形が振り子の時計、毎正時に人形がボールをシュートするカラクリのサッカー時計、蛇口から水が流れているように見えるカラクリのついた時計など、レトロで面白い時計がたくさんあった。うわーすごいと見ていたら、奥からニコニコ笑顔の社長さんが出て来られた。

僕が新聞を見て来たことを話すと、社長さんはひとつひとつ説明してくださった。紙でできている時計は、薄い紙を何枚も重ねて作られていること、社長さんが作った人に三年も頼んで売ってもらったこと。宝物入れのようなショーケースを開けて、江戸時代の携帯日時計を折り畳んで見せてくださったり、世界で初めて作られた、人形が14本の棒鈴をたたいて演奏する「ミネラルサウンドクロック」や、20台しか作られていない、20体の人形がベルをたたいて演奏する「スモールワールドカントリー」などの演奏ボタンを次々と押してくださった。すごすぎて、目が回りそうだった。

沢山の写真を撮り、帰ってすぐに僕は渾身のレポートを書いた。

「メガネのヨシダができて120しゅうねんだそうです。ヨシダはりっぱなお店でした。」

それから社長さんに、お礼の手紙を送ったら、数日後、
「明日佳さんのよろこびが伝わって、私たちもとてもうれしい気持ちになりました。」
という返事が届いた。僕は大人から手紙をもらうのが初めてだったので、とびあがるほど嬉しかった。何度も読み返して、ますますヨシダが好きになった。そして、こんなに親切にしてもらったんだから、今度から時計やめがねの用事ができた時はヨシダへ行こうと家族で話した。

僕は、社長さんに自学ノートを見せたら喜ばれるんじゃないかと思いついた。そして今度はノートを持ってヨシダに出かけた。

社長さんは、
「うわあ、これはすごいなあ。ヨシダの歴史まで、ほらこんなに詳しく書いてあって。」
と、まわりの社員さんと見てくださった。そして、「時計のひみつ」という本をくださった。

社長さんと記念撮影をした後、
「このノートのことを、ブログに載せてもいいですか。」
と聞かれた。僕はブログが何か分からなかったけど、パソコンに僕のことが載るのは分かって、カッコいいなと思った。数日後、僕のことが社長のブログに書いてあった。

「こんな小さなお子様が、時計に興味を持たれてここまでまとめて下さって、涙が出るくらい嬉しいです。」

僕のノートの写真も載っていて、ブログって自学ノートみたいだなと思った。

この年、平成24年3月31日朝刊に、ヨシダが「日本でいちばん大切にしたい会社」の審査員特別賞に選ばれた、という記事が載った。「りっぱな会社」と思ったのは僕だけではないと分かって嬉しかった。

四年生になって、時計の修理でヨシダへ行った時、半年前よりキャラクターの目覚まし時計が少ないことに気がついた。その年はタイで洪水があり、時計工場が被災して生産数が落ちていることを、店員さんが教えてくださった。新聞で見たタイの洪水とヨシダの時計が頭の中

でつながって、すごいと思った。
今年の5月、「とらや通信」というヨシダの広報紙に、僕がヨシダ秘蔵の火縄銃を持った写真が載ったが、その話はまた別の日に。

七月二十六日(水)　夏休み終了まであと37日

朝刊に大変なニュースが載った。
「公立小中　夏休み短縮の動き」
それによると北九州市は、二年後の'19年度から6日短縮の予定らしい。ついに来たか…という気持ちと、僕は助かったなという気持ちでまぜこぜになった。
二年前の9月11日の朝刊の北九州面に「小中学校の夏休み短縮検討」の記事が載った時、僕はめちゃめちゃ焦った。なぜなら僕は、夏休みと冬休みと春休みを心の支えとして何とか学校に行っている「どうにかこうにか中学生」だからだ。中学校で僕が部活をしなかった理由のひとつに、夏休みをこれまで通りに自分の自由にしたかった、というのもある。ちなみに小学生の時は、「どうにかこうにか小学生」であった。
小学生の時、僕は夏休みに動く模型を作ることを楽しみにしていた。自分の頭の中にあるものを形にするので、一度で大成功ということはない。材料をかえて作り直したり調整したりするのに、お盆のあとの二週間は貴重だった。夏休みを逆に長くして欲しいくらいなのに短縮なんてあんまりだ。
僕は市長さんに手紙を書いた。小二から五年間、理科区展で金賞だったこと、(金賞の上には特選がある)、小一から五年間、「早寝・早起き・朝ごはん・読書活動」で表彰式に出たこと、これは夏休みが沢山あったからこそできたんだ、ということを訴えた。賞をとったとったなんて書いたら、感じの悪いやっちゃと思われそうだと気になったが、説得力のある文章にするためには致し方ない。しばらくして、教育委員会の人から返事が届いた。
「夏休みを短くするかどうかについては、現在まだ話し合いを行っている段階です。(中略)このような中で、

梅田さんからのお手紙は大変貴重な参考意見になりました。」

夏休み短縮は全国的な流れだし、一学期に教室にエアコンが設置されたのを考えると、この問題はいずれ、「いつから、どのくらい短縮するか」になるだろうと思った。だが、自分がこの問題に関しての意見を伝えられたこと、それに対して丁寧なお返事をもらえたことに満足した。

実は、僕が市長さんに手紙を出したのは、これが初めてではない。

一回目は小三のクリスマスの頃だ。11月26日夕刊「知識たまる通帳」、下関市立図書館が全国で初めて導入した読書通帳の記事を見て、「市長さんにお願いしてみよう。」

と思った僕は、ヨシダの社長さんから手紙をもらって相当気を良くしていたと思われる。

クリスマスカードに書いて市役所前のポストに投函したら、年明けすぐに、中央図書館の館長さんから返事が届いた。僕への手紙の下に書かれた「保護者の方へ」の書き出しに僕は度肝をぬいた。

「お寄せいただきました、図書館に対するご意見について、市長より指示がありましたので、回答させていただきます。」

読書通帳は、他の情報システムを予定している北九州市で、すぐに導入する事は難しい状況だ、と書いてあった。残念だったが、市長さんに手紙を出したら、その内容によって返事を書く人が変わると分かった。新聞記事の感想はノートに書いたが、手紙のことは書かなかった。これが、「自学」がノートの外に飛び出したはじめの出来事だった。

三回目は去年12月、北九州市に平和資料館を作るため、米国立文書館に担当の人が調査に行く、という記事に対して、

「機雷についても調査してください。」

と書いた。

「機雷」とは簡単に言うと海にしかける爆弾の事だ。太平洋戦争末期、関門海峡には、米軍によって全国に敷設

された機雷の約半数の約四六〇〇個が投下されたことを呉市の「てつのくじら館」で知り、中二の春から本で調べ続けていた。

北九州に住んでいれば、小倉が二発目の原爆投下第一目標だった事と八幡大空襲の事は学校で習って知ることになるのだが、機雷の事は知らなかった。機雷の敷設は、市史などには被害数の記載はあっても、子供の読み物で出会うことは、まずない感じなのだ。

戦争は昭和20年に終わったが、海に投下された機雷には、そんなことは分からない。その機雷はどうなったのか？僕は読みまくった。半年経って僕は、機雷に関する部分は、参考にした資料がどの本もごく限られたものからの引用で、今の調べ方だけでは新しい発見は難しいだろうと思うようになった。それは嬉しい気づきだったし、この先がいよいよ研究になるのは分かるが、どうすればいいのか分からなかった。そんな時に平和資料館の記事を見つけた。今の自分の力では調べられないことを、専門の人に調べてもらいたいと思った。

「梅田君が最近までそのことを知らなかったということも、大変参考になりました。」

僕はお礼の返事と一緒に、機雷について調べて書いたものを送ったら、一ヶ月後、その中で僕が資料を見つけられなかったと書いていたことについて調べて、資料のコピーを送ってくださった。仕事が忙しいのに、市役所の人が僕の作文を丁寧に読んでくださったことが分かって嬉しかった。調べたことを一つの作品にしておいて良かったな、とも思った。

話は戻り、僕の夏休みは九年間、八月は全て休みのまま、義務教育を終えることになった。偶然なんだろうけど、頑張って手紙を書いた結果だと勝手に思っている。

8月5日(土)　夏休み終了まであと27日

「昼から行くとこ、どっちにするか決めた？」

ついに決断の時が来た。市立文学館「精霊の守り人」展は九月三日まで、松本清張記念館「清張と鉄道」展は

十月いっぱい…今日のところは文学館が正解だ。

僕は行きつけの資料館が市内にいくつかある。ここで言う「行きつけ」とは、僕のノートにコメントを入れてくださっている資料館のことだ。ところが今年は、勉強の予定をたて、今行かなければ一生後悔するだろうと思うイベントの予定を入れたら、この日しか残らなかった。勝手に常連だと思っているイノベーションギャラリーはこの夏はガマン。安川電機みらい館も、公開日を知ってしまったらガマンできなくなるのでホームページを見るのをガマン。高校生になったら少しは自由が戻って来るのか、それとも…？

北九州市立文学館は、中央図書館の入口の向かい側にある。図書館に本を返してから行ったら、いつも親切にしてくださる職員さんに、

「講演会に参加ですか？」

と聞かれた。講演会？一瞬何のことか分からなかったが、奥の、イベントがある時に控え室として使われているスペースに、人がいっぱいいるのに気付いた。もしかして…？

「こんにちは、梅田君も上橋さんの講演会？」と、こどもと母のとしょかんの司書さんに声をかけられた。控え室の中に、上橋奈穂子さんがいる！でも何で？

「急に決まったみたいですよ。私も図書館のカフェで偶然知って。」

申し込みをしていないので席につくことはできないが、この館は吹き抜けになっていて、話は館内どこにいても聞こえる。ホームラン級の大ラッキーだ。チケットを渡されながら、「展示を見る時、音が気になるかもしれませんが…」

と言われたが、いえいえいえ願ってもないこと、常設展示のある二階からそっと下をのぞくと、僕に気付いた参考室の司書さんの口がこんにちは、と動いた。

上橋さんは、自分の話したことが違う感じに伝わるのは困るので、カキコミなどしないでください、と話してから講演を始めた。その後のギャラリートークにはちゃっかり参加した。

帰宅後に向かったのは、自学ノートではなく、午前中の続きの英語ワークだ。夏休み明けの課題テストが終わってから体育大会までの二週間で貼ろうと取ってある新聞が、部屋のあちこちに溜まってきた。完全に物置きと化した学習机が片付くのはいつだろう？

資料館で自学ノートを見てもらうようになったのは、中学生になってからだ。小学生の時は担任の先生がコメントを入れてくださっていたが、卒業してからは宙ぶらりんになっていた。

北九州イノベーションギャラリーは、別名「産業技術保存継承センター」で、「ＫＩＧＳ（キッグス）」で、子供が遊べる場所なのかイマイチ分かりにくいのだが、実は最新の技術で遊べる楽しい資料館だ。僕はここで、からくり儀右衛門こと田中久重の作ったカラクリに出会い、関門地区の近代史に興味を持つようになった。企画展は、興味を感じないテーマの時も、ぜひ続けて足を運んでもらいたい。学校で習う理科と社会科が実は地続きだと分かったことが、僕がここに通って得たいちばんの収穫だ。小学校卒業直後に行った「ＴＨＥ　世界一展」、中学校入学直前の「東田（ひがしだ）ものがたり」のレポートを読んでくださいとお願いしたら、職員の片峰陽子さんが、ノートのあちこちに解説を書いたふせんを貼ってくださった。

「東田ものがたり」は、当時世界文化遺産登録を目指していた「明治日本の産業革命遺産」を応援する企画展で、製鐵所設置場所の選定がどんな風に行われ、八幡に決まるまでどんな運動をしたかということ、第一高炉に火が入ってから安定した操業ができるようになるまでの苦労がよく分かるものだった。

「最後のコーナーに、『八幡製鐵所の世界遺産登録を応援しよう‼』と書かれたボードがありました。そのボードに色々なメッセージのふせんを貼っていると、職員さんが、いろんな事を話してくれました。ぼくの事を覚えてくれていたのでうれしかったです。」

この部分に片峰さんは、

「今ではボードに、たくさんの花が咲きました。世界遺産に決定するまで、まだまだ応援してくださいね。」